

総合工学委員会・機械工学委員会合同計算科学シミュレーションと工学設計分科会
計算科学を基盤とした産業競争力強化の検討小委員会
(第25期・第1回)
議 事 要 旨

日 時 令和3年 3月30日(火) 13:00～15:00

会 場 オンライン会議(WebEX)

出席者 佐々木直哉、金田千穂子、青柳岳司、青木伸俊、井手貴範、宇佐見護、大出真知子、大野隆央
越塚誠一、白鳥正樹、萩原一郎(敬称略)

議事

(1) 役員の選出

25期の役員として、佐々木委員が委員長として選出された。佐々木委員長からの指名で、副委員長として金田委員、幹事として、宇佐見委員、大出委員が任命された。

(2) 議事要旨の委員長一任について

委員による審議の結果、議事要旨の委員長一任が承認された。

(3) 小委員会委員間のメールアドレス共有について

委員による審議の結果、メールアドレス共有について承認された。

(4) 24期の振り返り

資料4の報告書概要内容を再確認した。

- ・報告書の緒言にポストコロナ社会を踏まえた内容を追加したほうが良い。
- ・章番号の誤記を修正すること。
- ・24期途中で退任された委員名も報告書に記載する事。

(5) 25期の進め方など

25期の進め方について、以下の議論があった。

- 参加委員数が少ないので参加希望者を増やす魅力ある検討内容を加えたらどうか・・・AIなど。委員の補強として、分科会からの新たな参加者を募ることも検討してはどうか。
- 24期は産業競争力強化案をまとめたので、25期はそれを浸透させる。
- AIなどの流行りの分野は企業が積極的に取り入れているので、検討対象から外しても良いのではないか？
- 一般企業はAIによって原理原則がわからなくても結果が得られれば良いと考える傾向が強めており、計算科学への期待が下がり始めている。
- 25期中に提言にまとめる方向(提言を目指しても最終的に報告になることが多いが目標は高く)。
- 提言は3年目ではなく、早め早めに対応したほうがよい。

- 汎用ソフトの普及活動ではなく、国プロ発の先端計算科学に基づいたソフトウェアの産業界への定着を議論するのが委員会の目的。
- 事例研究として提言予定の内容に基づいて特定のソフトウェアの産業化の後押しをしてみるの
はどうか。
→独立行政法人で対応できないか。→業務外なので難しい。→結局は評価が問題。
- ヨーロッパのNOMADの日本版：ソフトウェアに紐づく論文の引用数ランキングのようなもの
を作って評価対象にできないか？
→個人評価には適用が難しい。
- 基本として、24期の報告内容をまずはブラッシュアップする。
- インダストリーファクターの再検討（個人評価への適用性について）。
- 委員会設置提案書の目的にある通り、国プロ開発のソフトウェアの産業応用を議題にするべき
ではないか。
- 24期は抽象論、25期には具体性をもって議論をしたい。
- 育成・教育が大事とは、結局（人の）評価方法の話になるのではないか。
- 計算科学を新規産業の立ち上げに使うか、既存産業の後押しに使うのか意識する必要がある。
→計算科学技術自身が産業の中心として成り立ち始めている。
- ソフトウェアを作る人の育成・確保をしたい。
- 委員会開催頻度について：24期同様に2ヶ月に1度開催を基本とする。
- 次回は、2か月後ということで、5月～6月を予定。
- 25期もシンポジウムを開催する方向として、現状はオンラインでおこなう。

配布資料

- 資料1：議事次第
- 資料2：委員名簿
- 資料3：設置提案書
- 資料4：24期報告書概要
- 資料5：25期活動の視点（案）